

第10回 国際協力セミナー報告

「アポフ教授に聞く」

講師: Norman T. Uphoff (コーネル大学教授)

日時: 2008年2月27日 9:30~12:00

場所: 柏キャンパス 7階ラウンジ



議事: 読んだ文献に関する質問

セミナーで利用した文献:

- ・ "A Field Methodology for Participatory Self-Evaluation"

<文献内容>

この論文は、コミュニティレベルでの自己運営の能力を設立し、人々が経済社会的条件を自ら改善するために行った方法について述べている。キャパシティビルディングには評価が重要な要素であり、ここで紹介されている方法は、評価を参加型で自己評価として行う能力が育成されるのを助けるものである。

- ・ "Demonstrated Benefits from Social Capital the productivity of farmer organizations in Gal Oya, Sri Lanka"

<文献内容>

・ スリランカのケーススタディーを通して、灌漑管理を行う農民組織がどのようにシステムパフォーマンスの向上に寄与するか分析した。その中で、著者は価値観、基準、規則、などが互いに協力して物事を行うことを支えているとした。

質問内容:

<1つ目の文献について>

- ・ コミュニティグループにおいて、グループ促進者はどのように触媒の役目を果たすのか。
- ・ グループのリーダーとしての役割とファシリテーターとしての役割をグループ促進者はどのように区分するのか。
- ・ 自発的な評価を促す方法によって自発性を誘発できる場合と、元々のグループの人々に自発性があるかないかによってしまう場合があると思うが、それはどう考えるのか。
- ・ この方法を適応するグループの間に共通の特質があるか。
- ・ 参加が重要であるということは同じように考えるが、皆が参加すれば何かについての合意が得られるという場合ばかりではなく、話がまとまらない場合もあると思うが、なかなか合意が達成できないときにはどうするのか。

<2つ目の文献について>

- ・ プロジェクトが終了後、地元の人々と政府の人々との関係は変化しましたか？地元の人は政府の人を信用している？

- ・ 具体的に、Gal Oyaでの事業でどのようにオーガナイザーは人々の意識を変えてゆきましたか？
- ・ 社会組織の機能性をどのような量的指標を使って分析しますか？

セミナーを受けての感想：

- ・ 物理現象を扱う“科学”と、社会現象を扱う“社会科学”との比較への言及に同感することも多く、同じような考えをアポフ教授のように表現すると明瞭になるのだなという感想を持った。学際（interdiscipline）ばかりではなく、あるテーマの中でいかにいろいろな学問領域の視点を取り扱うかが大切だと私も思っていたが、ただ、アポフ教授は、学問分野を超えたものとして既に1970年代から言われていたという。
- ・ AならばBという因果関係はメカニズムであり、必要十分なものであるが、社会科学においては、双方向で従属的なものであり、決してまったく同じに繰り返される因果関係はない。アポフ教授は、メカニズムと、プロセスの相違について強調されていた。物理現象のメカニズムの解明は、条件下における唯一の因果関係が導き出されるが、社会現象の場合、状況を条件として取り上げても、その場固有のものとなる。アポフ教授は、ある場所でできたことが他でも同じように適用できるわけではないことを指摘されていたが、私の研究テーマにおいても、“メカニズム”や“プロセスの解明”、“方法の適応”のキーワードについてよく考えてみないとならないと改めて思った。
- ・ アポフ教授は絶えずcausation、mechanismとprocessが大切と言っていた。地域によって、プロジェクトによって、causation、mechanismが異なる。この二つを明らかにすることが人々の意識の変化につながると思った。そして、この二つを明らかにし、組織の活性化を促す一連のプロセスが、大切ということがわかった。外部者はあくまでも、組織の中でファシリテーターとして組織に働きかける。組織に活性化を促すよう、反応を誘発することが外部者のアプローチだということがわかった。